



Data

監督・脚本：ジャン＝ピエール・ダルデンヌ、リュック・ダルデンヌ

出演：アデル・エネル／オリヴィエ・ポノー／ジェレミー・レニエ／ルカ・ミネラ／オリヴィエ・グルメ／ファブリツィオ・ロンジオーネ

👁️👁️ みどころ

弁護士は受任拒否も可能だが、医者は診療拒否できないから大変。もっとも、時間外の受け付けを拒むのは自由だが、その結果診療所の近くで少女が死んでしまうと、「もしあの時ドアを開けていれば・・・。」という良心の呵責に苦しむことに・・・。

その後始まる、前途洋々の若き女医ジェニーによる探偵まがいの行動にはビックリだが、そこで顕著なのは医者としての冷静さと距離感。それをしっかり検証しながら、若き女医の探偵ぶりに注目したい。

さらに本作では、研修医の生きざまを絡めたヒロインの医者としての生きざまと、さり気なく入れ込んだフランスにおける移民問題の深刻さも合わせてしっかり考えたい。



■□ 『サンドラの週末』 に続く本作は必見！ □■

私は『ロルナの祈り』（08年）ではじめてダルデンヌ兄弟の作品を観て衝撃を受け『シネマールーム22』（133頁参照）、『サンドラの週末』（14年）を観て、ダルデンヌ兄弟の社会問題提起性に改めて感心した（『シネマールーム36』（193頁参照）。ダルデンヌ兄弟は、『サンドラの週末』ではフランスを代表する女優、マリオン・コティヤールを起用して、「ボーナスを選ぶの？それとも同僚を選ぶの？」という「究極の選択」を迫ったが、本作では、若い女医ジェニー（アデル・エネル）に対して、「午後8時の訪問者」を無視したことによって起きた少女の死亡事件を巡って、「あの時、ドアを開けていれば・・・。」という「後悔」や「罪悪感」の「処理」を迫っていく。ジェニーに何の落ち度もないのは当然

で、少女の死を捜査する警察官もそれは認めているが、当の本人は・・・？

『サンドラの週末』ではマリオン・コティヤールが出ずっぱりで、本作ではアデル・エネルが出ずっぱりで、ダルデンヌ兄弟が提示する「論点」に立ち向かっていくサマは興味深い。したがって、『サンドラの週末』に続いて本作は必見！

■□■あの時ドアを開けていれば■□■

弁護士は依頼者からの受任を拒否することができるが、医師は診療義務がある。しかし、医師といえども24時間働きづめはできないから、診察日や診療時間の制約があるのは当然。本作の主人公である若い女医ジェニーは、近々大きな病院に好待遇で入る予定だったが、今は知人の老医師（ファブリツィオ・ロンジョーネ）の代診で週に何回か彼の小さな診療所に勤務しており、今日もそこで若い研修医のジュリアン（オリヴィエ・ボノー）と共にある患者の治療にあたっていた。

やっと今日の診療を終え、ジェニーがジュリアンに対して「医者には患者に振り回されてはだめよ」とお説教を垂れていた時、受診者の来訪を告げるベルが鳴ったが、ジェニーは既に診察の受付時間が過ぎているうえ、今ジュリアンに垂れたお説教のこともあり、そのベルに應對しなかった。

すると翌日、突然刑事がジェニーを訪ねてきて、診療所の近くで身元不明の少女の遺体が見つかったと告げたから、びっくり！ひょっとして、その遺体は昨日の診療時間を過ぎた午後8時ごろに診療所のベルを鳴らした患者？もしそうだとすれば、あの時私がドアを開けていれば、少女は助かっていたのでは・・・？

■□■ジェニーの探偵のような行動は良心の呵責から？■□■

診療拒否は医師法違反だが、診察受付時間が過ぎていたのでベルに應對しなかったのは何の犯罪でもない。そのことはジェニー自身も分かっているが、本作中盤は、なぜ少女があその時間に診療所を訪れたの？彼女はなぜ診療所の近くで死んでしまったの？を巡ってジェニーが探偵のような行動をとっていくストーリー展開となるので、それに注目！もちろん、それはジェニーの日常の仕事＝診察の合間だから十分なことはできないが、それでも少女の死亡事件を捜査しているベンマムート警部（ベン・ハミド）とは綿密に連絡を取っているし、いつも少女の顔写真を持って誰彼となく「この女の子を知らない？」と声をかけているから、かなりのエネルギーだ。

弁護士ならともかく、医者が日々の診療の合間に死亡した少女の写真だけを持って少女の死亡事件の手がかりをさぐるのは、所詮無理な話。ところが本作では、ある日、自分の患者である男の子ブライアン（ルカ・ミネラ）に死亡した少女の写真を見せたところ、急激にブライアンの脈が早まったため、ジェニーは「ブライアンはきっと何か知っている」と

直感！両親には絶対秘密にするという条件でブライアンから事情を聞くと、ブライアンは死亡した少女を高架橋下にあるキャンピングカーで見たとの重要な情報を提供することに。そこで、ジェニーはキャンピングカーの持ち主（オリヴィエ・グルメ）に連絡を取って出かけて行き少女の写真を見せたが、その返事は「知らない」と冷たいもの。さらに、ジェニーは「ある有力な情報」を持って、ネットカフェに赴き、受付の女性（ ）に写真を見せたが、そこでも「知らない」とのつれない返事だけだった。しかも、ジェニーがそんな素人探偵を続けていると、ある日、乗っていた車を若いチンピラ風の男2人から無理矢理停止させられたうえ、「これ以上かぎ回るな！」と脅かされるまでに。

しかして、なぜジェニーはこんな危険を犯してまで探偵のような行動に走るの？これは、すべてあの時、私がドアを開けていれば、と思う良心の呵責から・・・？

■□■医者とは社会の病理にどこまで？この女医の距離感とは？■□■

弁護士は、個人VS個人の法律問題を越えて、公害問題、消費者問題等々の分野では、個人VS企業、個人VS既存の社会システムという問題に関与することが多い。もちろん、そういう法律の分野における「社会の病理」に、弁護士がどう立ち向かうかは個々の弁護士の自由だが、弁護士はそれに働きがい、生きがいを感じることもある。私もそんな弁護士の一人だ。しかし、医者の場合、とりわけ臨床医、開業医の場合は、個々の患者の身体に潜む病理を診察し治療するのが仕事だから、それに手いっぱい、で、「社会の病理」にまで目を向けたり、その解決のため行動することは少ない。そう考えると、「あの時私がドアを開けていれば・・・」という良心の呵責からとはいえ、本作に見るジェニーのような行動はきわめて珍しい。

もっとも、本作に見るジェニーの行動できわだつのは、あくまで医者としての視点、立場をキープした「距離感」。すなわち、ジェニーが探偵のようにかぎ回る行動は、警察に対しても患者の秘密を守る権利と義務があることを前提としたものだから、その聞き取りに応じる者には一種の安心感があるらしい。そんな医者としてのジェニーの「距離感」は、本作ラストのクライマックスで、ブライアンの父であるヴァンサン（ジェレミー・レニエ）が、自分のある行動のためにあの少女が死んでしまったと反省し、診療所のトイレの中で首つり自殺をしようとしたのを止めるについても、一種の客観性（＝冷静さ、冷たさ）を感じさせることにもなっている。

本作を監督したダルデンヌ兄弟が、なぜ本作のヒロインのような医者としての微妙な「距離感」を把握できたのかは不思議だが、本作では中盤に見るそんなジェニーの「距離感」をしっかりと検証したい。

■□■なぜ研修医は医師の道を諦めたの？2人の距離感とは？■□■

本作のメインテーマは、「あの時私が、ドアを開けていれば」という「良心の呵責」を契

機として、大きく揺れる女医ジェニーの生きザマだが、それと対比する形で登場するのが、ひ弱そうだが、自分の生き方にそれなりの信念を持った研修医ジュリアンの生きザマだ。フランスの研修医の制度がどのようになっているのかは知らないが、老医師の診療所でジェニーと共に働いていた研修医のジュリアンは、ジェニーから「医者には患者に振り回されてはだめよ」と言われたことにショックを受けたためか、急に医者への道を諦めて、田舎に戻ってしまったから、ジェニーはビックリ！ちょっとした「教育的指導」がそこまで影響を与えては、ジェニーの良心がまたまた呵責を覚えたのは当然。そこで、ジェニーは死亡した少女の手がかり探しと並行してわざわざジュリアンの家を訪れ、きつい言葉を投げかけたことを謝ると共に、再度医者への道を促したが、さてジュリアンは・・・？

ジュリアンがなぜ医者を目指したのか？ジェニーと一緒に患者に向かって仕事をしていた時、なぜジュリアンがあれほど狼狽したのか？そして、なぜジュリアンが「ボクは医者に向いていない」という結論を下したのかは、あなた自身の目でしっかり確認してもらいたいが、はっきり言って、このジュリアンの人生の選択は、如何なもの？私はそう思わざるえない。他方、ジェニーの方も、少女の死亡やジュリアンの医者への諦めという事態を受けて、自分の医者としてのあるべき姿が大きく変わったらしく、待遇の良い大病院への転身をやめ、老医師の小さな診療所のあとを引き継ぐことを決意。これはいわば、『白い巨塔』（66年）の財前五郎のような医者としての立身出世の道を選ばず、『赤ひげ』（65年）に見た新出去定医師のような生き方を選んだわけだが、それは一体なぜ？

本作にみる、2人のこのような行動を見ながら、なぜジュリアンは研修医の道を諦めたの？そして、研修医と女医の距離感は？という2つの問題をしっかり考えたい。

■高声ではないが、本作も一種の移民問題！■

フランスでは去る4月23日に行われた大統領選挙の第1回投票で既存政党への「ノン」がはっきり示され、39歳の清新なエマニュエル・マクロン氏と極右政党・国民戦線のマリーヌ・ルペン党首の2人が5月7日の決選投票に駒を進めることになった。そこでの大きな争点は第1に、EU重視かEUからの離脱か、第2に、移民の受け入れに賛成か否かだ。今年1月に発足したアメリカのトランプ政権は、メキシコに壁を造るという公約はまだ実行していないが、外国人の入国を巡る大統領令を巡る司法判断を含むイザコザは、既に現実問題になっている。ヨーロッパでは、ドイツのメルケル首相だけは移民に寛容だが、さてフランスの大統領選挙と移民政策の行方は？

本作冒頭に診療所の近くで死亡した少女は、警察の調べの中で名前だけは明らかにされるが、その出身、仕事、死亡原因等は明らかにされない。しかし、その肌の色から見て彼女が移民であることは明らかだ。ジェニーが訪れたネットカフェの受付の女性も、肌の色からして明らかかな移民だったが、本作ラストの「種明かし」では一体どんな事実が明らかに・・・？危険も顧みないジェニーの懸命な調査の結果、本作では少女死亡事件のカギを

握る男がブライアンの父ヴァンサンであったことが明らかになっていく。そして、少女の死亡原因についてヴァンサンの口から意外にありふれた事実関係が語られるが、それをあなたはどう考える？そして、やっと落ち着いて小さな診療所での診療生活に入ったジェニーを、ある日訪れてくる人物とは？

日本では、移民問題の深刻さは全然意識されていないが、フランスではこんな映画にも移民問題の影響が！移民問題を真正面から扱うのはイギリスのケン・ローチ監督の特徴で、ダルデンヌ兄弟監督の本作は移民問題を声高に扱っていないが、本作からも移民問題をしっかり考える必要がある。

2017（平成29）年4月27日記

洋17-58 ★★★★★

「午後8時の訪問者」

2017（平成29）年4月10日鑑賞<シネ・リーブル梅田>

監督・脚本：ジャン＝ピエール・ダルデンヌ、リュック・ダルデンヌ

ジェニー（女医）／アデル・エネル

ジュリアン（研修医）／オリヴィエ・ボノー

ヴァンサン（ブライアンの父）／ジェレミー・レニエ

ブライアン（ジェニーの患者の少年）／ルカ・ミネラ

キャンピングカーの持ち主／オリヴィエ・グルメ

ジェニーが勤める診療所の老医師／ファブリツィオ・ロンジョーネ

ベンマムート警部／ベン・ハミド

2016年・ベルギー、フランス映画・106分

配給／ビターズ・エンド